

ここでは、「現実と理想が大きく違い違うときに使う語」と考えられる用語。

一例として『菅家文草』「38 停習彈琴」の一句目にある「偏信琴書學者資（偏へに信ず 琴書は 學者の資なるを）」がそれである。琴と書が學者たるものの資質（素養）として避けては通れないものと固く信じて、その習得に務めて来たが、（現実はそのうではなかった）（傍線筆者）の句意と思われる。

この「429 元年立春」の七句目の「偏憑」の「偏」も『漢語大詞典』に言う副詞的用法で、「ひとえに。請い願ひ、あてにして来たが（現実には、全くそうとはならなかった）」の意を採る。（↓「四章」で詳述する）

7 憑…たのむ。よる。請い願う。ここでは直接的には以下の「延喜開元曆」を受ける語だが、八句目「東北廻頭拜斗杓」の行為全般をも受ける語とみる。

元曆：「こよみ」のこと。

岩波古典文学大系本の底本である尊経閣本では、**校異**の項でも指摘しているように「元曆」となっているが、他の写本及び刊本全本では「新曆」となっている。

8 東北…柳澤良一氏が詳細に考察されているように、ここでは「道真が立春の日に東北を仰ぐのは、（北）斗柄が東を指していることに拠るであろう。その「東」（東北）には都はあり、そこにいる醍醐天皇に勅赦を期待する気持ちも生まれたのだろう」（注4）のニュアンスを含有する用語。

廻頭…頭をめぐらす。回頭。

『漢語大詞典』には「把頭轉向后方」と説明し、